

文化交渉と日本の私塾および泊園書院

吾 妻 重 二

Cultural Interaction in Private Japanese Academies and *Hakuen Shoin*

AZUMA Juji

Culture is the result of incessant interaction with other regions. This thesis is a comparative study of cultural exchange in private academies established in pre-modern East Asia: China, Korea and Japan. I also clarify the features of Japanese academies in the view of East Asia. The Hakuen Shoin, the largest private academy of Chinese Studies in Osaka during pre-modern period, has been used to illustrate a concrete state of cultural interaction.

キーワード：私塾、泊園書院、中国、韓国、日本、ベトナム

一 文化交渉学の視点

1 文化と文化交渉

「文化」とは何だろうか。手元の『広辞苑』（岩波書店、一九七七年）を見ると、

人間が学習によって社会から習得した生活の仕方の総称。衣食住を初め技術・学問・芸術・道徳・宗教など物心両面にわたる生活形成の様式と内容を含む。

とある。文化というものを教科書的に定義すればこのようにならざるを得ないであろうが、そもそも衣食住・技術・学問・芸術・道徳・宗教など「物心両面にわたる生活形成の様式と内容を含む」とされるその「文化」は、いったいどのようにして形づくられたのであろうか。ここでは「人間が学習によって社会から習得する」としか述べられていないので、文化なるものが周囲にア・プリオリに存在しているかのように聞こえる。

もう一つ、『新明解国語辞典』（三省堂、二〇〇五年）を見ると、

その人間集団の構成員に共通の価値観を反映した、物心両面にわたる活動の様式（の総体）。という。ここでは「その人間集団の構成員に共通の価値観を反映した」という言い方が前の説明と違っており、個人よりもむしろ社会において共有されるものという視点が示されている。これは「日本文化」とか「ヨーロッパ文化」、「中国文化」など、「文化」を一定の広がりから理解するものであろう。しかし、ここでもやはり文化は静態的にとらえられており、あたかも日本文化やヨーロッパ文化なるもの

が固定的に存在しているかのようである。もちろん我々は「日本文化」、「ヨーロッパ文化」、「中国文化」といった言い方をよくするし、その場合我々は「日本人」や「ヨーロッパ人」、「中国人」という一定のまとまりをもった人間集団を念頭に置いている。しかし、そのような通俗的用法はともかく、いったい日本文化・ヨーロッパ文化・中国文化というその「文化」は、もともと「そこにある」ものなのだろうか。これらの文化に流動性はないのだろうか。他地域の文化との接触はなかったのだろうか。「日本文化」や「ヨーロッパ文化」、「中国文化」は、ガラパゴス島のように他地域と隔絶したまま形成されたのだろうか。

そんなことはあるまい。他地域から孤絶して発達した文化というものは観念的にはありうるかもしれないが、現実にはそのような文化を見出すことは困難である。「日本文化」なるものは中国やヨーロッパとの交流を抜きにしては語りえないし、「ヨーロッパ文化」なるものも非ヨーロッパ世界に起源したキリスト教やイスラーム地域からの影響と切り離して考えることはできない。「中国文化」の歴史がインド仏教やヨーロッパと関係をもつことはいうまでもない。

そうであれば、文化について考えるとき、「文化はどのようにして形成されたのか」という視点、とりわけ他地域との接触、交渉という視点を欠かすことはできない。人々は昔も今も他地域を訪れ、その事物や情報をもたらすとともに、みずからの生活の中にとり込み、活かしてきたからである。他地域を訪れたことのない人々でも他地域から入って来る情報からまったく無縁であることはできなかったであろう。そのような相互の交渉が自地域の文化を形づくり、豊かなものにしてきたことは疑いようのない事実である。もちろん、他文化とどれほど交渉をもったのか、その強弱の程度には時代や地域、個人によって差があるであろうが、基本的にはこのように考えてよい。そのことは、たとえば江戸時代一つを考えてみてもわかる。日本が中国文化から最も大きな影響を受けた時期は、実は日本が「鎖国」政策をとっていた江戸時代であった¹⁾。

言い換えれば、文化は地域を超えてたえず流動するのである。「国籍」や「居住地」は固定していても、「文化」は決して固定していない。国籍は日本人であっても、その文化は日本国内だけで閉じられておらず、ヨーロッパに居住していたとしても、その文化はヨーロッパ地域内で自己完結していない。文化は国境を超えて形づくられている — このような流動性こそ、「国家」や「民族」をリジッドにとらえてその利害関係を論じる国際関係論や国際政治論、領土論などとは異なる文化学の論理といえよう。

2 文化交渉の表層と深層

このように、文化は他地域とのたえずの交渉によって成り立っている。この場合、「交渉」には大きく分けて二つのレベルがあると考えられる。一つは人やモノなどの物質的交渉、一つはいわば精神的交渉であり、情報や技術、制度、思想、宗教、芸術、年中行事など人々の営みにかかわっている。いまかり

1) 吉川幸次郎「受容の歴史 — 日本漢学小史」(『吉川幸次郎全集』第17巻、筑摩書房、1975年)は、日本の文明において「中国を価値とする態度が、最も高まった江戸時代」(同書二三頁)として、中国文化受容史における江戸時代の文化的状況をとらえている。もちろん、このような状況が江戸時代に生じたのは、「鎖国」政策のもとにおいても、長崎や対馬、薩摩・琉球といった海外に開いた窓口があったからで、そのことはロナルド・トビ『「鎖国」という外交』(『全集 日本の歴史』第9巻、小学館、2008年)が論じている。

に、前者を表層レベルの交渉、後者を深層レベルの交渉と呼ぼう。

まず、第一の表層レベルの交渉であるが、これは、いつ、どこで、誰が、どのようにして他地域と接触し、どんなモノが運ばれてきたのかといったことである。この方面における考察の典型は、大庭脩による唐船持渡書の研究に見ることができる。大庭の『江戸時代における唐船持渡書の研究』（関西大学出版部、一九六七年）および『江戸時代における中国文化受容の研究』（同朋舎、一九八四年）は、江戸時代、長崎という窓口を通じて中国のどのような書物が日本にもたらされたかを究明したすぐれた研究である。

ただし、大庭の研究は、実は書物をモノとして扱うもので（これは大庭教授自身の語でもある）、書物に記述される知識や情報の中身はさほど考察されていない。もちろん、モノがどう移動したかの調査は文化がどう伝播したかを知るために必要なことであって、そうした史実の究明は文化を論じるための重要な基礎となる。しかしそれは文化論の重要な部分ではあるが、そのすべてではない。つまり、文化を広く論じるためには文化の内実へと踏み込まなければならないわけで、かくして深層的交渉について考察する必要がある。

第二の深層レベルの交渉は、表面的事実から一步進んで、それがどのような結果を生じたのかという実質的内容にかかわるものである。そうした研究は、『広辞苑』の語を借りるなら「衣食住を初め技術・学問・芸術・道德・宗教など物心両面にわたる生活形成の様式と内容」が、どのような交渉・接触を通じて形成されたのかを分析することである。いつ、どこで、誰が、どのようにして他地域と接触し、モノがもたらされたかが知られたとして、では、そのような接触がどのような反響をもたらし、ひいては当該地域の「技術・学問・芸術・道德・宗教」などを形づくったのであろうか。これは、接触を通じて異文化がどう理解され、受容され、変容を遂げたのかを究明することにほかならない。

そのような研究を代表するものとしては、ひとまず後藤末雄の業績を挙げることができよう。その『中国思想のフランス西漸』二冊（東洋文庫、平凡社、1969年）は、史実の解明のみならず、中国の思想がフランスの思想にいかに関与を及ぼし、根を下ろしたのを該博な知識をもって論じており、文化交渉史研究の先駆的業績になっていると思われる。

もちろん、以上のような表層レベルと深層レベルは複雑にからみあい、表層レベルの交渉は往々にして深層レベルの交渉をともなっている。書物というモノが伝来すれば、それがすぐに読まれることで書物の中身が伝わり、何らかのかたちで文化的反響や影響を及ぼす、といったように。したがって、どれが表層でどれが深層かというふうに区別することが難しいことも多いのだが、いずれにせよ「文化」について研究する場合、我々は文化が「交渉する」ことを前提にしつつ、文化の内実——その形成のダイナミックな姿を解明する視点を持つ必要があるであろう。

二 書院・私塾について

1 書院と私塾

ここで話題を変えて、文化交渉の一つの事例として「書院」「私塾」を取りあげてみたい。近世東アジアにおける文化の最大の特徴は何とんでも儒教とりわけ朱子学の広範な伝播であり、その様相をとら

えること自体、文化交渉の興味あるテーマなのだが、朱子学の伝播にともなう書院や私塾と呼ばれる民間の学問所が東アジアの国々に盛んに設けられたこともこの時期の文化の特色であった。

「書院」とはもともと、文字どおり「書物」を蔵する建物、すなわち図書館もしくは書斎を指す語であり、そこから士人の読書のための別邸の意味にもなったが、これが「民間の学問所」の意味となって盛行するのは十世紀、中国の宋代以降であり、四大書院といわれる大規模書院が多数の学生を集めたこと、南宋に至って書院が各地に次々と建てられたことなどは周知のところであろう²⁾。士人と呼ばれる知的エリートの活躍や出版技術の発達、書物の普及に伴って民間における講学が急速に発展し、儒教を中心とする知の世界が活発化するのである。

もちろん当時、太学をはじめ「州県学」と呼ばれる官立の学校が首都および各地に設けられてはいたが、これら官立学校は主に科挙受験のための予備学校であり、一時期を除き、教育や学問研究の施設としては十分機能していなかった。近世の時代、講学・教育の場としては官立学校よりも私立学校たる書院の方が圧倒的に優勢だったわけで、朱熹や陸九淵、呂祖謙、明の王守仁、湛若水といった時代を代表する思想家たち、あるいは博大精確を誇る清朝考証学者たちが拠りどころとした学問の場はほかならぬ書院であった³⁾。宋代以降、書院が中国における知の主演となったのである。

ここで注意すべきことは、同様の民間の学問所が中国のみならず、近世の東アジアにおいて盛行したという点である。近世とは、さしあたり中国の宋代（十世紀）以降、朝鮮王朝後期（十七世紀以降）、ベトナムの黎朝（十五世紀）以降、および日本の江戸時代（十七世紀以降）を指すが、そうした状況についてはかつて素描を行なったことがある⁴⁾。

2 私塾・書院発達の時期

まず、日本の私塾から見てみよう。私塾の開設数は江戸時代初期においてこそ少ないが、寛政年間（1789-1800）頃から活発化し、文化・文政以降幕末にかけて、すなわち十九世紀前半にその数が急増する。江戸時代に開設された私塾の正確な数は把握しがたいが、『日本教育史資料』に記録されたものだけでも千三百校あまりにのぼり⁵⁾、全国では数千に達したと思われる⁶⁾。官立の藩校や初等教育の場である手習所（寺子屋）が急激な勢いで全国に広まったのもほかならぬこの時期であり、「儒学の大衆化⁷⁾」や「教

2) 中国の書院に関する研究は多いが、盛朗西『中国書院制度』（華世出版社、1934年）、陳元暉・尹徳新・王炳照『中国古代的書院制度』（上海教育出版社、1981年）、鄧洪波『中国書院史』（東亜文明研究叢書30、国立台湾大学出版公司、2004年）、卞孝萱・徐雁平編『書院与文化伝承』（北京・中華書局、2009年）が有益である。

3) 書院（民間の学問所）の普及が中国および近世東アジア文化の重要な指標であることは、湯浅邦弘編『概説 中国思想史』（ミネルヴァ書房、2010年）の第五章「宋代」で指摘しておいた。なお、他の指標として挙げたのは、①科挙制度の整備と文人官僚の活躍、②新興士大夫の登場、③商業の発達、④新しい書き言葉、⑤印刷と情報革命の五点である。

4) 近世東アジアにおける書院のもつ意味については、吾妻「東アジアの書院について ― 研究の視角と展望」（『東アジア文化交渉研究』別冊2「東アジアにおける書院研究」、関西大学文化交渉学教育研究拠点、2008年）で論じた。

5) 海原徹『近世私塾の研究』（思文閣出版、1983年）17頁。

6) 石川松太郎「私塾」（『国史大辞典』第6冊、吉川弘文館、1985年）772頁。

7) 宮城公子『幕末期の思想と習俗』（ぺりかん社、2004年）第1章「幕末儒学史の視点」。

育爆発⁸⁾」が起こったといわれるゆえんである。大都市のみならず、地方の小都市にも、また支配階級たる武士ばかりか、商人や富農など庶民階層にも教化が普及し、庶民出身で儒学を学び、幕政に参与することになった人物も多い。

一方、中国の場合、書院は明清時代に数多く作られた。鄧洪波の調査によれば、明代の書院は千九百六十二カ所にのぼり、これだけで、先立つ唐、五代、宋、遼、金、元に存在した書院の総数の二倍を超えるという。成化・弘治年間（1465-1505）頃から増加し、嘉靖年間（1522-1566）にピークを迎え、万暦年間（1573-1620）に第二のピークを迎える⁹⁾。続く清代は書院が空前の繁栄を迎えた時代で、合計四千三百六十五カ所が確認できるという。数としては乾隆年間（1736-1795）が最も多く、康熙年間（1662-1722）と光緒年間（1875-1908）がこれにつぐ¹⁰⁾。

これに対して、朝鮮では中宗三十六年（1543）に建てられた白雲洞書院を嚆矢として次第に増加し、朝鮮王朝後期、とりわけ1690年代に最も多く開かれた。高宗の隆熙二年（1908）に刊行された『増補文献備考』に記録される書院は三百七十八カ所だが、これは政府によって把握された数であって、実際には先賢を奉祀する祠宇書院を含めると千カ所にのぼったといわれる¹¹⁾。

ベトナムにおける民間の学校がどうだったかはよくわからない点もあるが、十五世紀以降、科挙の整備とともに民間の学校が設けられるようになったことは明らかで、とりわけ阮朝の十九世紀以降、都市および農村にかなり普及したと指摘されている¹²⁾。

このように、中国、日本、朝鮮、ベトナムでは民間学校の盛行時期にズレがあり、要するに中国を発信地として波状的に拡大していったものといえる。

では、話を日本にもどして、日本において民間の学問所はどのように位置づけられ、どのような特色をもつのだろうか。以下、日本の私塾につき、文化交渉的視点を通して他の東アジア地域の場合と比較しつつ考察をしてみたい。また、泊園書院は江戸時代後期に大阪に作られた大規模私塾だが、これまで研究が不十分だったことにかんがみ、その特色や意義についても述べることとする。

三 日本の私塾の特色

1 私塾とは何か

私塾は江戸時代を通じて全国にほとんどくまなく普及した。私塾とは要するに私的に設けられた小タイプの学問所の意味であり、日本の場合、武士を対象とする昌平坂学問所・藩校などの官学と、初等教育を行なう卑近な手習所（寺子屋）の中間に位置する施設である。

8) 市川寛明・石山秀和『図説 江戸の学び』（河出書房新社、2006年）。

9) 注2所掲の鄧洪波『中国書院史』341頁、350～351頁。

10) 鄧洪波『中国書院史』532頁、541頁。

11) 以上、최완기『한국의 서원（韓国の書院）』（대원사、1991年）19～20頁、40頁。

12) 嶋尾稔「ベトナムにおける伝統的私塾に関する研究のための予備的報告」（注4所掲『東アジア文化交渉研究』別冊2「東アジアにおける書院研究」）、DINH Knac Thuan「ベトナム教育史概説」（二ノ宮聡訳、『東アジア文化交渉研究』第3号、関西大学文化交渉学教育研究拠点、2010年）。

ところで、「書院」の名は日本ではほとんど使われなかった。江戸時代の関連資料を豊富に載せる『日本教育資料』により江戸市中の私塾の名称について調査した海原徹は、

『日本教育資料』第八冊に収録された一二三校より不明三三校をのぞいた九〇校のうち、もっとも多かったのは塾、およびこれに類する三〇校（塾二三、義塾三、家塾二、学塾一、私塾一）であり、以下、堂二二校、舎二〇校（学舎一〇、舎九、精舎一）、学校四校、社三校、楼二校、教授所一校、所一校、黌一校、軒一校、書院一校、館一校、亭一校、道場一校、斎一校などの順となる¹³⁾。

といている。すなわち、「塾」と呼ばれる場合が最も多く、「堂」や「舎」と名づけられるものがそれにつぐ。これは江戸市中に限った話であるが、全国的にもほぼ同様だったであろう。書院の名をもつ私塾は、有名なものでは中江藤樹（1608-1648）の藤樹書院、藤澤東暁（1794-1864）の泊園書院、池田草庵（1813-1878）の青谿書院など少数にとどまり、泊園書院ももとは泊園塾といていた¹⁴⁾。大阪の懷徳堂も中井竹山（1730-1784）が「懷徳書院」の呼称を用いたことがあったが、通称にはなっていない¹⁵⁾。なぜ日本で書院の名称があまり用いられなかったのかは不明だが、「書院造り」と区別する必要があったことや、後述するように、日本の私塾が中国や朝鮮王朝の書院と違ってプライベートな性格が強く、また一般に規模が小さかったためと思われる¹⁶⁾。

一方、中国でも「私塾」の語は使われていた。しかしそれは初学者教育の場であった。近年の劉曉東は私塾を「私人もしくは私人グループによって維持された低ランクの、“養正啓蒙”を主旨とする基礎教育活動およびその組織形式」と定義し、これが普及した明代における私塾を「社学」、「義学」、「家塾」の三タイプに分類している¹⁷⁾。これに対し、中国における書院が士人を中心に高次の学問研究と講学を行なう場であったことはいうまでもない。朝鮮の場合もこれに類似しており、士人による講学は書院が担い、素読を初めとする初等教育は書堂が行っていた。

なお、ベトナムの場合、一般に「書院」は書物を蔵する図書館の意味で用いられ、民間の学校は「郷学」とか「漢文を教える先生の教室 LỚP ÔNG ĐỒ」と呼ばれることが多かったようである。ベトナムでは高次の講学を担う民間の学問所は未発達で、民間では教師の家に出かけて行って漢字・漢文の初等教育を受けるのが一般的であった。またベトナム語にも「書院 THƯ VIỆN」の語はあるが、それは図書館の意味であり、中国におけるもとの原義を残している¹⁸⁾。

このように、同じ民間の学問所ではあれ、中国ではレベルの高低によって「書院」と「私塾」が設けられ、朝鮮においては「書院」と「書堂」があったわけで、書院と私塾・書堂との間にはかなりはっきりした境界線が存在する。ところが日本の場合そのような明確な区別はないのであって、塾と呼ばれよ

13) 注5所掲の海原徹『近世私塾の研究』7頁。

14) 吾妻重二編著『泊園書院歴史資料集 — 泊園書院資料集成1』（関西大学東西学術研究所資料叢刊29-1、関西大学出版部、2010年）232頁、240頁。

15) 湯浅邦弘「書院としての懷徳堂」（大阪大学出版会、注3所掲『東アジア文化交渉研究』別冊2所収）。

16) このほか、大名屋敷の表座敷を意味する「書院」との混同を避けるためでもあったろう。

17) 劉曉東『明代的塾師与基層社会』（北京・商務印書館、2010年）1頁、29頁。

18) 注12所掲の嶋尾論文およびDINH Knac Thuan「ベトナム教育史概説」106頁。また佐藤トウイウエン氏の教示による。

うが書院と呼ばれようが大きな違いはなく、まとめて「私塾」として一括することができる。ちなみに、中国の私塾や朝鮮の書堂、ベトナムの「郷学」「LỚP ÔNG ĐỒ」に相当する教育施設は、日本では手習所（寺子屋）である。以上を整理すると次のようになる。

東アジアにおける民間の講学施設

	日 本	中 国	朝 鮮	ベトナム
講学・研究（高次）	私塾	書院 shūyuàn	書院 서원	未発達
初等教育（低次）	手習所 （寺子屋）	私塾 sishú	書堂 서당	LỚP ÔNG ĐỒ （漢文の教室）

私塾という語は中国や朝鮮の用法からすると初等教育の施設となるが、日本の場合必ずしもそうではないことに注意すべきである。繰り返すが、私塾は、規模はともあれ、中国や朝鮮の書院に相当する、高レベルの教学を含む講学施設であった。

2 日本の私塾の特色

（一）私的性格

次に、日本の私塾の特色について考えてみよう¹⁹⁾。日本の私塾が中国の書院をモデルにしたことはほぼ間違いなく²⁰⁾、官学に対する民間の講学施設として発達したわけだが、日本の場合は私的性格が特に強いと思われる。三輪執斎が、

士庶の学を好むもの、其徳人を服するに足れるもの、又皆ひそかに学舎をたて、其徒をいざなふ²¹⁾。といい、辛島塩井が私塾を「学政」すなわち政府の文教政策とは別のところで発達してきたとし、

浪人儒者等一家私塾等ニテ門人ヲ仕立ルヲハ銘々思々ノ偏好ニテモスム様ナモノ²²⁾。

といているのは重要な説明で、私塾は学徳にすぐれた個人が政府の方針とは無関係にめいめい勝手に作ったもので、当局側の統制を受けず、「士庶」すなわち武士や庶民の階級を問わずさまざまな身分の者が主宰したという。私塾は、公的教育機関である昌平坂学問所や藩校が当局の一定の方針のもとに、しかももっぱら武士のみを教育したのとは違う自由な裁量のもとに運営されていた。

（二）政府当局との関係

私塾のプライベートな性格はまた、政府（幕藩当局）との政治的結びつきをもたないということの意味する。これに関しては中国や朝鮮の書院と共通点もあるが、違いもある。中国・朝鮮の書院はがんらい個人がみずからの学芸を教授するために私的に作られたものであるが、中国では南宋末期以降、朝廷の庇護もしくは統制を一定程度受けるようになる。朝廷から額や図書を賜わる書院が増大したのもその

19) 以下の記述は注5所掲の海原徹『近世私塾の研究』序章によるところが多い。

20) 吾妻重二「江戸初期における学塾の発展と中国・朝鮮 — 藤原惺窩、姜沆、松永尺五、堀杏庵、林羅山、林鶯峰らを含めて」(『東アジア文化交渉研究』第2号、関西大学文化交渉学教育研究拠点、2009年)。

21) 三輪執斎「執斎先生雑著」巻2、井上哲次郎・蟹江義丸編『日本倫理彙編』第2巻（東京・金尾文淵堂、1911年）491頁。

22) 辛島塩井「学政或問」、『日本教育史資料』（文部省、1890～1892年）第八冊、1頁。

ため、書院が「官学化」したという指摘もしばしばなされている。中国と朝鮮において「賜額書院」という朝廷お墨付きの書院が数多く存在し、別格扱いされて尊重されていたことは周知のとおりである²³⁾。しかし、日本において賜額書院のような事例はまず存在しない。幕府の官許や庇護を受けた私塾としては、林羅山に始まる林家家塾（のちの昌平坂学問所）や懷徳堂が目につく程度である²⁴⁾。

つまり、幕藩側政府当局は私塾に対してほとんど無関心であり、基本的に自由放任の態度で接していた。当局の手によって塾が強制的に閉鎖されるということが幕末期における一部の例外を除いてほとんどなかったのもそのためであろう。

（三）私塾の存続期間

すぐれた個人の学徳を慕って学生が集まり、そこに自然発生的に私塾ができるわけであるから、当の塾主が死去すると、塾は多くの場合閉じられてしまう。海原徹はそのことを、

私塾の経営は大い教師その人であったが、これはもともと私塾が、秀れた個人の人格や学問を慕って集まった学徒を中心に営まれたためであろう。多くの私塾が創設者である教師一代かぎりで消滅したのは、このためである。たしかに、伊藤仁斎の古義堂のように、何代も塾主が代わり、二〇〇年以上も存続するものもなかったわけではないが、私塾の私塾らしさはむしろ比較的短期間で消滅したところにある²⁵⁾。

と説明している。ここに挙げられた仁斎の古義堂のほか、百四十年あまり続いた懷徳堂、九十二年間続いた広瀬淡窓創設の咸宜園、百二十年ほど続いた泊園書院などはむしろ稀有な例であり、おおむね私塾が一代限りの経営にとどまったことは注意を要する。

これに対して中国の場合、白鹿洞書院や岳麓書院の例に見られるとおり、宋代以降、千年もしくは数百年にわたって維持された書院、もしくは復興を遂げて存続した書院は少なくない。これは政府や官僚による保護と関係があると思われる。また、朝鮮においては、書院に奉祀された名賢を子孫が管理運営するようになり、朝鮮王朝後期には多くが「門中書院」として長期間にわたり維持された。このように一族をあげて書院を維持していくというのは朝鮮独特のものらしく、そのような形態は日本の私塾にはほとんど見られない。

（四）祭祀機能

中国の書院が先賢を祀る機能を持っていたことは良く知られる。これは朝鮮についても同様で、祠宇書院と呼ばれる書院が数多く作られたことは先述したとおりである。祀られたのは孔子や学派・書院の

23) 朝鮮の書院に関しては、梅根悟監修『朝鮮教育史』（世界教育史大系5、講談社、1975年）、丁淳睦『韓国書院教育制度研究』（嶺南大学校出版部、1979年）、注11所掲의 崔 완 기 『한국의 서원（韓国の書院）』、鄭萬祚『朝鮮時代書院研究』（集文堂、1997年）、李樹煥『朝鮮後期書院研究』（一潮閣、2001年）などがある。韓国における書院研究のビブリオグラフィとしては、薛錫圭『韓国書院研究目録』（注4所掲『東アジア文化交渉研究』別冊2「東アジアにおける書院研究」所収）が詳しい。なお、賜額書院の例は中国にも多い。

24) 林家家塾は、寛永七年（1630）將軍家光から塾の敷地を賜わり、寛永九年（1632）には尾張藩主の徳川義直から「先聖殿」の額を賜わるなど、將軍家から手厚い庇護を受けていた。また、懷徳堂は享保十一年（1726）、三輪執斎の斡旋により幕府から官許を賜わった。

25) 注5所掲の海原徹『近世私塾の研究』29頁。

創設者であるが、これは学派の存続という「学統」、および宗族の維持という「血統」の保持を目的とするものである。しかし、日本の私塾には古義堂や懷徳堂、泊園書院のように孔子を祀ることはあるが、塾の創設者を祭祀したケースはほとんどないようである。これは日本の私塾が一般に廟（祠宇）としての機能をもたなかったことを意味する。

（五）私塾と財政

私塾経営の費用は生徒の収める束脩や謝儀によってまかなわれた。束脩は入学金、謝儀は授業料に相当する。また、塾舎はたいてい教師個人の住宅であり、「建設費はもちろん、維持費も教師側が負担するのがふつうであったが、なかにはその一部を塾生が負担する場合もあった²⁶⁾」。言い換えれば、中国や朝鮮に見られるような学田や書院田の収穫によって経営を維持するという形は一般にとらなかったのであり、私塾は今ふうにいえば学費による独立採算制をとっていた。これは、日本の私塾がほかならぬ教師と学生の個人的結びつきに依拠した、すぐれて私的な組織だったことと関係があらう。

（六）私塾と政治活動

日本の私塾が政治活動を推進した例はあまり見られない。もちろん、幕末期という社会的激動期においてはそのようなケースも生じ、大塩中斎の洗心洞、吉田松陰の松下村塾、天誅組の双松岡塾²⁷⁾、大橋訥庵の思誠塾²⁸⁾などは政治結社の色彩が強い。しかし、江戸時代全般を通じてそのような私塾はまれであった。

一方、中国や朝鮮においては、書院がしばしば政治運動の拠点となった。明代後期の王守仁や湛若水の影響によって作られた書院、あるいは明末の東林書院はそのような例であり、これらは政府当局の怒りにふれて忌避や弾圧の対象となった。また、清代には政府の保護とあいまって書院が各地に設立されるが、清初の順治九年（1652）には、

各提学官督率教官、務令諸生将平日所習經書義理着実講求、躬行実践、不許別創書院、群聚結党、及号召地方遊食之徒、空談廢業²⁹⁾。

（各提学官は教官を督率し、務めて諸生をして平日習う所の經書の義理^{もつ}を将て着実に講求し、躬行実践せしめよ。別に書院を創りて群聚結党し、及び地方の遊食の徒に号召して空談し業を廢するを許さず。）

という上諭が頒布されていた。これは民間書院における政府批判の芽をつみとろうとしたものであって、逆にいえば書院が政治言論の場になる可能性が高かったことになる。

また、朝鮮の場合、士林と呼ばれる知識人たちが在野勢力として書院を政治運動の勢力拠点とし、王朝権力に果敢に対抗したことはよく知られるとおりである。そして、そのような行動が王朝の怒りに触れ、1871年、高宗の父として権力を握った興宣大院君によって書院が淘汰されることになったわけである。

26) 注5所掲の海原徹『近世私塾の研究』42頁。

27) 双松岡塾については、梅溪昇編著『大阪府の教育史』（思文閣出版、1998年）222～225頁参照。

28) 大橋訥庵については、注7所掲の宮城公子『幕末期の思想と習俗』第2章「〔誠意〕のゆくえ——大橋訥庵と幕末儒学」が有益である。

29) 『欽定大清会典事例』巻395。

（七）私塾の多様性

私塾の圧倒的多数を占めるのは中国の古典を教授する漢学塾であったが、これについて江戸時代後期には日本の伝統的学芸を教える国学塾が各地に営まれた。その後、蘭学塾を中心とする洋学塾も設けられ、幕末期にはイギリス、フランス、ドイツ、ロシアの言語や学問を教授する私塾も登場した³⁰⁾。一方、中国においては、洋務運動から清末にかけて新式の書院が建てられるが数は少なく、朝鮮の書院はほとんどが朱子学を宗旨としていた。このように、多様な私塾が設けられたことは中国や朝鮮にない特徴となっている。

＊

以上、日本の私塾につき中国および朝鮮と比較しつつ見てきたが、ここに読みとれる特色を一言でいえば「自由」ということである。公権力の支援に頼らず、したがって政府当局の文教政策の枠外にあって、一般庶民の教育機関として全国津々浦々に普及したのである。政治イデオロギー的性格も希薄である。もちろん、自由といっても一定の制限があり、たとえばキリシタンの学校はもちろん禁止だったが、少なくとも幕藩政権を批判しない限りにおいて自由に学問所を作り、教師の方針次第でいかようにも講学を行なうことができた。このような自由で多様な学校としての性格は、同じ民間の学校とはいえ、中国とも朝鮮とも異なる特色になっていると思われる。したがって各私塾の特色も個性的である。

四 泊園書院について

1 泊園書院

今度は、大阪の私塾、泊園書院に焦点をあてて見てみよう³¹⁾。

泊園書院は文政八年（1825）、四国高松出身の藤澤東暎（1794-1864）によって大阪市中に開かれた。農民出身の東暎は高松で名儒中山城山（1763-1837）に師事し、三年間の長崎留学を経て、文政八年、三十二歳の時に開塾したのである。文政年間は私塾が盛んに開かれた時代であり、儒学が武士はもとより、農民や商人にまで学ばれた時代であったことは上述したとおりである。また東暎は嘉永五年（1852）、高松藩から士分に列せられているが、これもこの時期、庶民が学問によって武士という身分を獲得した多くの例に重なっている³²⁾。東暎は、そのような新たな時代の申し子であった。

その後、幕末維新の動乱を経て、明治六年（1873）、東暎長子の南岳（1842-1920）によって書院が再興され、さらに南岳の長子の黄鵠（1874-1924）および次子の黄坡（1876-1948）という「三世四代」の院主、さらに黄坡義弟の石濱純太郎（1888-1968）により維持された。泊園書院は百二十年あまり続いたわけだが、私塾経営が数世代にわたって続いたケースは日本では少なく、また、江戸時代から明治維新を経て昭和前期に至る近世・近代の激動期をくぐりぬけてきた漢学塾はもっとまれである。

30) 海原徹『学校』（日本史小百科、東京堂出版、1996年）の「私塾」の項。

31) 以下、泊園書院については注13所掲の吾妻重二編著『泊園書院歴史資料集 — 泊園書院資料集成1』を参照されたい。また、吾妻「泊園書院に関する史実について」（吾妻重二編『泊園記念会創立50周年記念論文集』、関西大学東西学術研究所国際共同研究シリーズ9、関西大学出版部、2011年）も見られたい。

32) 注7所掲の宮城公子『幕末期の思想と習俗』第1章「幕末儒学史の視点」28～32頁。

泊園書院は荻生徂徠の学統を継ぐ漢学塾で、いわゆる「古文辞学」を宗旨とする。古文辞学は古代漢語の言語的研究に基礎を置くもので、漢字文献への広い関心に裏づけられている。そのため、泊園書院では儒教經典の講学はもちろんのこと、先秦諸子の研究、漢詩文の実作と鑑賞などを展開し、日本漢学塾の多くを占めた朱子学派とはいっぼう違った学風をもっている。さらに日本的な尊王思想をつけ加えることで、幕末には尊王の志士たちの慕うところともなったが、これは同書院の日本的特色といえる。

いま、同書院のもつとりわけ顕著な特色を挙げてみよう。

第一に、門人の多さがある。東暎の時代、教えを受けた門人は近畿・四国地方を中心に全国に分布し、総計三千人を越えていたらしい。これは当時の懷徳堂の塾生数をしのぐもので、泊園書院は幕末期における大阪最大の塾であった。明治時代になると、塾生の数はもっと増える。明治三十七年（1904）に作成された門人録である『登門録』の例言には、

明治六年本院再興以来及門ノ弟子約五千人ナリ然ルニ此ニ載録スル所其ノ半数ニ満サルモノハ及門諸君ノ住所不明却テ其半数已上ニアレハナリ。

とある。さらに、昭和九年（1934）十一月発行の新聞『泊園』第十二号所載の「泊園會第一回定時總會報告書」に「及門の子弟は萬を以て數へ」という。南岳亡き後、黄鵠、黄坡、石濱純太郎が引き続き書院を維持したことを考えれば、門人は累計で確かに一万人を越えたであろう。

要するに塾生数としては幕末の時点で約三千名、明治中期に約五千名、昭和初期には累計で優に一万人を越えたと推測される。その分布も北は北海道から南は九州にまで広がっている。

第二に、学則とカリキュラムがある。泊園書院はかなり厳密な学則・カリキュラムのもとに学生を教育しており、政治論議にあけくれたり、市民向けの講義に終始する塾とは違い、教育施設として充実した体制をもっていた。そのことは刊本の『泊園塾則』や写本で伝わる「泊園書院学制」および「本学学制署掲」、さらに新聞『泊園』に掲載された日課表によって知ることができる³³⁾。これらの規則は広瀬淡窓の咸宜園を参考にしたふしがあり、詳細については今後の検討を待たなければならないが、もっとさかのぼれば中国の元代に著わされた『程氏家塾読書分年日程』をはじめとする中国の学制の影響があるかもしれない。

第三に、孔子を祀る釈奠儀礼を行なってきたことが挙げられる。南岳は明治二十一年（1888）、書院内で初めてこれを実施し、明治三十六年（1903）からは大阪藤井寺の土師神社（道明寺天満宮）の大成殿で釈奠を実施している。この釈奠儀礼はその後、現在に至るまで続いており、今年（2011年）で実に百八回目を迎えた。百年を超える長い間、孔子の祭祀を毎年たえまなく行なってきたケースは日本近代において唯一のものと思われる。

第四に、刊行物を継続して出版した点がある。東暎・南岳・黄鵠・黄坡の著作には泊園書院から刊行されたものが多い。いわゆる刻書事業も行なっていたわけである。また、明治二十二年（1889）には「泊園同窓会規則」が定められ、同会はその後ほぼ毎年同窓会誌を発行し、書院の活動や会員の消息、「文苑」「詩壇」といった会員の漢詩文欄、会計報告などの情報を載せた。同窓会誌は少なくとも大正六年

33) 吾妻「泊園書院の隆盛とその教育」（『関西大学東西学術研究所創立六十周年記念論文集』、関西大学出版部、2011年）を参照。

(1917)まで出ているが、同窓会自体は昭和前期まで続いた。黄坡と石濱純太郎はさらに昭和二年(1927)十二月、タブロイド版新聞『泊園』を創刊、この新聞はその後形を変えつつ昭和十八年(1943)まで出版されている。

第五に、有為な人材を数多く輩出したことである。とりわけ幕末と明治の時代には東暎と南岳の名声と学問、人徳を慕って全国から学生が集まり、政界・官界・法曹界・実業界・教育・ジャーナリズム・学術・文芸などの各界にすぐれた人物を生み出したことはよく知られるとおりである。

第六に近代的学術への強い志向がある。これは大正後期から明確になった傾向で、大正九年(1920)、石濱は黄坡の協力を得て学術団体「泊園書院学会」を設立し、『泊園書院学会々報』を刊行した。この雑誌は近代的学問方法に裏づけられた高度な学術誌であって、京都の小島祐馬、青木正児らが「支那学社」を作り、雑誌『支那学』を刊行した翌年のことにあたる。『支那学』が日本における近代的学問としての中国学(Sinology)のメルクマールたることはいうまでもない。『泊園書院学会々報』は石濱の外遊により第二冊までしか刊行されなかったが、泊園書院においても、漢学から中国学・東洋学へという近代的脱皮がはかられたことは注目すべきである。

これらのことは、泊園書院における教育、講学、研究が活発に続いていたことの証であって、その役割の大きさをよく示している。泊園書院は近世・近代日本における文芸・学術の発展に巨大な貢献を残したといえよう。民間の漢学塾として中国・朝鮮の書院と共通項をもちつつ、日本の私塾として独自の発展を遂げたのである。

五 泊園書院と東アジアの文化交渉 ― 人物を中心に

さて、漢学塾であった泊園書院が中国とのかかわりが深かったことは当然だが、そこでは中国の古典はもちろんのこと、同時代の中国に対してもたえず関心が払われていた。同時代の朝鮮にかかわった門人も多い。次に、そうした交渉の事例について見てみたい。

1 同時代中国との関係

東暎は文化十三年(一八一六)、二十三歳の時、海外への窓口だった長崎に遊学し、「唐音」すなわち中国語を学んだ。中国語を学ぶというのは徂徠学派の言語研究の主張にもとづくものであるが、同時代中国(清)への関心の強さも良く示している。

天保十一年(一八四〇)には、清から輸入された銭梅溪編『海外新書』が長崎の町年寄の高島秋帆から東暎のもとに届けられた。その中に刷り上ったばかりの荻生徂徠『弁道』『弁名』の二著すなわち「清板二弁」があったため、東暎は門人たちと驚喜し、これを祝った³⁴⁾。これは日本と清の文化交流を物語る事例であり、幕末当時、大きな話題となったものである。

34)『海外新書』と東暎に関しては、水田紀久「『海外新書』浅説」(『近世日本漢文学史論考』所収、汲古書院、1987年)、陶徳民「「清板二弁」を祝う泊園の賀宴 ― 幕末における徂徠学の動向」(『関西大学東西学術研究所創立五十周年記念論文集』所収、関西大学出版部、2001年)に考察がある。

同時代の中国に深くかかわった人物としては、³⁵⁾田結莊千里、岸田吟香、岡鹿門、日比野輝寛、岡本韋庵、そして第三代院主の黄鵠らが注意される。

田結莊千里（1815-1896）は大塩平八郎の洗心洞門人で、大塩の乱ののち一年間投獄されたが、出獄後も勉学に励み、篠崎小竹、広瀬旭莊、および東咳に学んで研鑽を積むほか、長崎に遊学して蘭学を学んだ。幕末の動乱期には尊王攘夷を主張し、幕府に時務策を提言した。著作はきわめて多く、『重修身世準繩』、『増註伝習録』、『大学心解』、『孫子心解』などがある。その墓碑文は南岳の撰になる。進取の気性の持ち主だった彼は、維新後の明治二年（1869）、清に渡って三年間滞在し、海外の実情を視察している³⁵⁾。

岸田吟香（1833-1905）は美作（岡山県）の豪農の子。安政三年（1856）東咳に入門し、中国語と漢学を学んだ。その後、慶応二年（1866年）、日本最初の和英辞典『和英語林集成』の印刷刊行のためにアメリカのヘボンと上海に渡航し、翌年までその校訂と印刷につとめた。維新後は『東京日日新聞』の主筆として活躍し、近代日本におけるジャーナリストの草分けとなった。のち東京銀座に楽善堂を開いて売薬業を始め、中国にも販路を広げた。中国各地に病院を設けた同仁会や、上海の東亜同文書院の設立など、実業家・教育家としても業績をあげたのである。洋画家として知られる岸田劉生はその四男で、「劉生」の名は中国文化に傾倒していた吟香が中国風の名前をつけたものである³⁶⁾。

岡鹿門（1833-1914）は仙台藩士で、江戸の昌平黌で学んだあと、文久元年（1861）、大阪で松本奎堂、松林飯山と双松岡塾を開いて尊王攘夷を唱え、志士と交流した。この時、東咳は二十歳の南岳の教育を彼らに依頼している。鹿門は戊辰戦争に際して一時投獄されたが、明治三年（1870）、東京に出て大学の助教、東京図書館長となる。同十七年（1884）には中国に遊び李鴻章と会談した。その著『在臆話記』は幕末の泊園書院の様子を伝える貴重な記録である。中国各地を遊歴した記録『観光紀游』もある³⁷⁾。

日比野輝寛（1838-1912）は美濃（岐阜県）の高須藩士で、号は維城、また懽成。文久二年（1862）、幕府が長崎から上海に使節を派遣した際、幕船千歳丸に高杉晋作、納富介次郎らとともに随行員として乗り組んだ。文久三年（1863）、東咳に入門。維新後は名古屋明倫堂教授、大蔵省官吏となる。京都大学東洋史教授・日比野丈夫の祖父でもある³⁸⁾。

岡本韋庵（1839-1904）は徳島の小農に生まれる。名は監輔。嘉永元年（一八四八）、東咳に入門。前半生は樺太探検と北海道開拓にとりくみ、後半生は儒学教育に情熱を注いで台湾総監府国語学校教授、私立神田中学校校長となる。このように探検家・教育者として活躍するとともに、漢学復興にもつとめ、

35) 以上、南岳の墓碑文「田結莊千里墓」（『南岳先生撰文墓碣銘集』所収、泊園文庫蔵自筆稿本）による。なお、その孫の田結莊金治は『孝経』に共鳴し、関西大学図書館にはその収集になる『孝経』関連文献の貴重コレクション「玄武洞文庫」が蔵されている。

36) 藤澤南岳『菁莪録』、杉山栄『先駆者岸田吟香』（大空社、1993年）、杉浦正『岸田吟香：資料から見たその一生』（汲古書院、1996年）を参照。このうち『菁莪録』は注13所掲の吾妻重二編著『泊園書院歴史資料集——泊園書院資料集成1』に影印を載せている。

37) 梅谷溪『大阪府の教育史』（思文閣出版、1998年）222～225頁、宇野昌介『鹿門岡千仞の生涯』（仙台、岡広、1975年）参照。

38) 日比野丈夫『文久二年上海日記』（全国書房、1946年）、衛藤藩吉「日本人の中国観」（『日本法とアジア』第3巻所収、勁草書房、1970年）を参照。

明治十四年（1881）に結成された斯文会の初代書記となった。著書は『北蝦夷新誌』、『窮北日記』、『烟台日記』、『万国史記』などきわめて多数にのぼる。また、明治九年（1876）から二年あまり漢文による雑誌『東洋新報』を刊行するが、なぜわざわざ漢文体にしたかという、漢文という中国・朝鮮・日本の共通書記言語を通して東アジア地域における情報と知識の相互交換をはかるためであった³⁹⁾。

黄鵠は明治三十二年（1899）年、清国に遊学してまもなく帰国、翌三十三年（1900）、再び清国に留学し、足かけ二年、中国の朝野の人士と交わるとともに、南京の東文学堂で中国語を学んだ。これは東咳以来の中国語学習の伝統を受け継ぐものである。泊園文庫に蔵される『官話指南』は清の呉啓大・鄭永邦撰になる中国語教科書で、黄鵠による書き入れがびっしりとなされ、その勉学ぶりをよく物語っている⁴⁰⁾。黄鵠には留学当時の日記『三山二水録』『天外浮槎日録』もあり、現在、泊園文庫の自筆稿本として残されている。

2 同時代朝鮮との関係

同時代の朝鮮との関係をもった泊園門人としては大城戸宗重^{おおき ひと}、下岡忠治、幣原坦、植野武雄らがいる。

大城戸宗重（1855-1921）は加賀藩（石川県石川郡鶴来町）の生まれで、号は念庵。明治初期に泊園書院に学び、明治十一年（1878）、二十四歳で二松学舎塾頭となり、三島中州の養女、三島数子と結婚した。のち官僚となり、徳島県参事官などを経て朝鮮総督秘書官となり、明治四十四年（1911）から朝鮮総督府東京出張所をあずかった。大城戸の次女恭子は石濱純太郎の妻である。故郷にある「念庵大城戸君碑」は黄坡が撰している⁴¹⁾。

下岡忠治（1870-1925）は摂津川辺郡広根村（兵庫県猪名川市）の酒造業の家に生まれる。明治十六年（一八八三）以降、大阪の中学に通うかたわら泊園で南岳に学んだ。第三高等中学を経て明治二十八年（一八九五）、帝国大学法科大学政治学科を卒業、高等文官試験に首席で及第した秀才で、ついで内務省に入り、秋田県知事、商農務省農務局長、農商務次官、枢密院書記官を歴任。その後、衆議院議員となり、憲政会幹部として活躍した。大正十三年（一九二四）、第四代朝鮮総督府政務総監となる。朝鮮総督府政務総監は朝鮮総督のもとに置かれた親任官で、軍事権を除く行政・立法・司法の実務を統括する大官である⁴²⁾。

幣原坦（1870-1953）は大阪府門真市の出身の東洋史家・教育行政官。外務大臣・第四十四代内閣総理大臣幣原喜重郎の兄である。明治十五年（一八八二）、十三歳で泊園書院に入り、漢学を四ヶ月間専修する。東京高等師範学校教授、韓国学部学政参与官、文部省視学官、東大教授を歴任した。その後、台北帝国大学初代総長などを歴任し、終戦後、枢密顧問官となる。著作には『日露間之韓国』、『韓国政争史』、

39) 藤澤南岳『菁莪録』、林啓介『樺太・千島に夢をかける：岡本韋庵の生涯』（新人物往来社、2001年）を参照。『東洋新報』については沈国威「岡本監輔与汉文杂志《东洋新报》（1876-1878）」（ICIS第4届国际学术研讨会论文集「印刷出版与知识环流——16世纪以后的东亚」レジュメ、2010年10月、関西大学文化交渉学教育研究拠点ICIS）がある。

40) 泊園文庫蔵『官話指南』については、日下恒夫「清代南京官話方言の一斑——泊園文庫蔵『官話指南』の書き入れ」（『関西大学中国文学会紀要』第5号、1974年）が有益である。

41) 町泉寿郎「大城戸宗重について」（<http://www.nishogakusha-coe.net/naibu-kindai-2.pdf>）参照。

42) 『三峰下岡忠治伝』（三峰会、1930年）を参照。

『朝鮮教育論』、『朝鮮史話』など韓国関係のものが多⁴³⁾。

植野武雄（1949没）は泊園門人で軍人の植野徳太郎（1869-1950、号は木州）の長男。父の徳太郎は軍人でありながら漢学の造詣が深く、漢詩集『木州詩存』を残した。同書の扉の書名は中国の羅振玉が書いている。子の武雄は東京帝国大学支那文学科選科生出身の東洋史研究者で、上海東亜同文書院図書館主任、京城大学法文学部助手、満鉄の大連図書館司書となり、戦後関西大学講師となった。著書に『満州地方志考』、『満支典籍攷』などがある⁴⁴⁾。

3 アジア学へ — 石濱純太郎ら

このような泊園書院がもっていた東アジア世界への志向は黄坡の義弟石濱純太郎に至ってははっきりと顕在化する。

石濱の事績についてはすでにいくらか触れたとおりだが、東京帝国大学文科大学支那文学科を卒業した石濱はまもなく内藤湖南に師事し、中国の領域を超える東アジア学に研究の範囲を広げていった。モンゴル語を学び、ロシアのニコライ・ネフスキーとともに西夏語の研究を世界で初めて開始し、大阪の町人学者富永仲基につき着実な研究を進めたのである。戦後の昭和二十四年（1949）関西大学文学部教授となった石濱は、「泊園文庫」の関西大学への寄贈に貢献し、関西大学文学部に東洋文学科を作り、また東西学術研究所を設立するなど多大な貢献を残している。石濱が昭和時代を通じて東洋学の泰斗であったことは、その古稀を祝う分厚い論文集『石濱先生古稀記念 東洋学論叢』（関西大学、1958年）によってもわかる。この論文集には当時、日本を代表する東洋学者・中国学者五十三名が論文五十二篇を寄せており、その執筆者の顔ぶれを見ても石濱が日本の東洋学を代表する大きな存在だったことがわかる。

さらにいえば、冒頭に言及した大庭脩は昭和六十一年（1986）、『江戸時代における中国文化受容の研究』（同朋舎、1984年）により第七十六回日本学士院賞に輝いたが、大庭のこの研究の出発点となったのはほかならぬ泊園文庫の研究であり、それはまた石濱の薫陶によるものであった⁴⁵⁾。石濱の残した業績とその意義については今後、いっそうの研究が必要と思われる。

おわりに

本稿ではまず文化および文化交渉学の視点について検討し、ついで文化交渉の事例として書院・私塾をとりあげ、日本の私塾の特色を東アジア規模において明らかにした。さらに大阪の漢学塾、泊園書院に焦点をあててその特色を指摘するとともに、同書院をめぐる東アジアの文化交渉につき人物を中心に論じてみた。

43) 『文化の建設 幣原坦六十年回想記』（吉川弘文館、1953年）、門真市史編纂委員会『門真市史』（門真町役場、1962年）1020頁以下を参照。

44) 石濱純太郎「竹城植野武雄先生」（『関西大学学報』第233号、1950年）、植野武雄編『木州詩存』（木州詩存刊行会、奉天、1939年）を参照。

45) 石濱純太郎については、注14所掲の吾妻重二編著『泊園書院歴史資料集 — 泊園書院資料集成1』第六章「石濱純太郎」を参照されたい。

論旨は多岐にわたり、とりあげた事項もさまざまである。初めに述べた文化交渉の表層と深層の二つのレベルのうち、本稿では主に事実関係の表層レベルをとりあげ、文化の内実すなわち深層レベルまで十分踏み込むことができなかった。今後の課題としたい。

いずれにしても、文化というものはきわめて多彩な内容をもっている。これを研究する場合、複数の文化がどのように交わり、展開したのかという「文化交渉」の視点は重要な視点といえよう。今後、各方面においてそのような研究が活発に行なわれ、文化の動態的姿がいつそう明らかになることを望みたい。